

研究主題「自分の考えや気持ちを積極的に伝えようとする児童の育成

－伝える手段を自ら選択し、表現できる指導の工夫－

東京都教職員研修センター研修部専門教育向上課
杉並区立済美養護学校 主任教諭 佐藤 誠

第1 研究のねらい

小学校学習指導要領（平成29年3月告示）の前文では、「これからの学校には、こうした教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。」と示されている。また、特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編（幼稚部・小学部・中学部）（平成30年3月）では、知的障害のある児童生徒の学習上の困難を、「知的障害のある幼児児童生徒の場合、コミュニケーションが苦手で、人と関わることに消極的になったり、受け身的な態度になったりすることがある。」と示されている。これらのことから、多様な人々と協働するために、障害の特性に応じて児童一人一人に自分の考えや気持ちを伝える意欲を高めることが大切であると考えた。

本研究では、児童が自分の考えや気持ちを伝えるための手段を選択し、その手段を活用して伝える姿を意欲の高まりと捉えることとした。伝えるための手段は、児童の実態によって様々である。それらの手段を児童がより多く身に付け、活用できるようになることを目指し、『自分の考えや気持ちを伝える手段』を把握するための一覧表を開発することとした。開発物を指導に活用することで児童の成長につなげ、その有用性を明らかにしていく。

児童が自分の考えや気持ちを伝えるための手段を身に付け、様々な場面で自ら表現できたという成功体験を積み重ねることで、積極的に伝えるようになることを研究のねらいとした。

第2 研究仮説

『自分の考えや気持ちを伝える手段』を把握するための一覧表を用いて指導することで、児童は「自分の考えや気持ちを伝える手段」を自ら選択し、自分に合った手段を身に付け、自分の考えや気持ちを積極的に伝えるようになるだろう。

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

知的障害特別支援学校の児童生徒を対象としたコミュニケーションの指導に関する先行研究の分析を行い、知的障害のある児童が自分の考えや気持ちを伝えるために用いる手段として、次の12種類を挙げた（発声、発語、写真カード、絵カード、文字カード、タブレットPC、コミュニケーションブック、コミュニケーションボード、クレーン現象、身振り、絵カード交換、サイン）。

2 調査研究

令和元年7月及び8月に、都立及び区立特別支援学校4校の教師135人を対象に、担任している児童の自分の考えや気持ちを伝える意欲とその手段の現状について質問紙による調査を行った。対象児童数は604人であった。

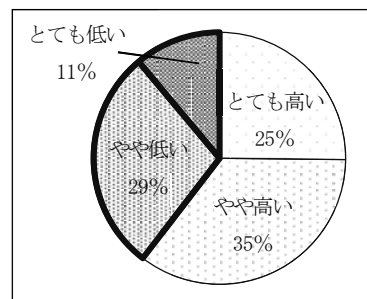


図1 教師が考える児童の自分の考えや気持ちを伝える意欲

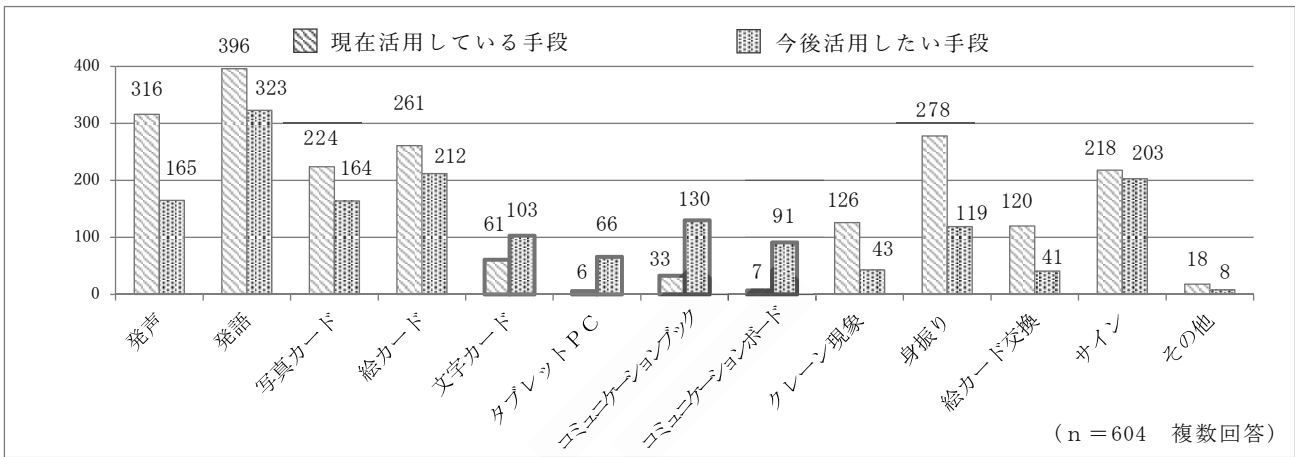


図2 児童が自分の考えや気持ちを伝えるようになるために、現在活用している手段と今後活用したい手段

担任している児童について、児童が自分の考えや気持ちを伝える意欲の現状を質問した結果から、自分の考えや気持ちを伝える意欲が低い傾向を示す児童が40%いることが分かった(図1)。また、児童が自分の考えや気持ちを伝えるために、教師が現在活用している手段の質問の結果からは、タブレットPCやコミュニケーションボードなどの手段は活用頻度が低いことが分かった(図2)。以上のことから、教師は児童が自分の考えや気持ちを伝えるための手段をより多く身に付け、学習や日常生活で活用し、個の実態に応じた多様な手段を活用できるように工夫する必要があると考えた。

3 開発研究

(1) 『自分の考えや気持ちを伝える手段』を把握するための一覧表』の開発

表1 『自分の考えや気持ちを伝える手段』を把握するための一覧表

	実物	写真	イラスト	文字
自分の考えや気持ちを伝えるための手段	○実物	○写真カード ○コミュニケーションボード(写真) ○コミュニケーションブック(写真) ○タブレットPC(写真)	○絵カード ○コミュニケーションボード(イラスト) ○コミュニケーションブック(イラスト) ○タブレットPC(イラスト)	○文字カード ○コミュニケーションボード(文字) ○コミュニケーションブック(文字) ○タブレットPC(文字) ○定型文(カード)

基礎研究で、知的障害のある児童が自分の考えや気持ちを伝えるために挙げた12種類の手段を、「具体物で表現する際に用いる手段」(写真カード、絵カード、文字カード、タブレットPC、コミュニケーションブック、コミュニケーションボード)、「言語で表出する際に用いる手段」(発声、発語)、「身体で表現する際に用いる手段」(クレーン現象、身振り、サイン、絵カード交換)に分類した。「言語で表出する際に用いる手段」と「身体で表現する際に用いる手段」は、具体物を用いない手段であり、「具体物で表現する際に用いる手段」と区別することが分かりやすいと考えた。タブレットPCやコミュニケーションボードなど教師が活用したいと考えている「具体物で表現する際に用いる手段」を、指導に取り入れることができるようにした。

また、「具体物で表現する際に用いる手段」が既に身に付いている児童に対しては、より汎用性の高い文章で自分の考えや気持ちを伝える手段を身に付けることができるよう定型文(カード)を加えた。文章で伝えることのできる児童は「私は○○をしました。」のような話形を手段とし、より適切に自分の考えや気持ちが伝えられるようになることを目指した。

これらの手段を一覧にしたものが『自分の考えや気持ちを伝える手段』を把握するための一

覧表」である（表 1）。自分の考えや気持ちを伝えるための手段を一覧で示すことで、教師は児童が既に身に付けている手段と、これから身に付ける必要のある手段を明確に把握して、系統立てた指導を行うことができると考えた。

(2) 「つたえかた いちらん」の開発

児童が自ら伝えるための手段を選択・活用することができるように「つたえかた いちらん」を開発した。教師が「つたえかた いちらん」を児童に示し、自分の考えや気持ちを表現する際に、一覧に示された手段の中から、児童が選択し活用できるようにする。「つたえかた いちらん」に示された手段を学習の目的に合わせてしぼり込み、手段の写真カードや絵カードを3枚程度にして提示する。児童が提示された手段の中から選択し、活用できるようにする。

4 検証授業及び検証授業の分析

(1) 検証授業の概要

区立特別支援学校小学部第6学年の児童全8名を対象に、生活単元学習「そうじをしよう」（全5時間）の授業において検証授業を実施した。児童が「つたえかた いちらん」を用いて伝えるための手段を自ら選択し、活用する学習において、自分の考えや気持ちを表現しようとする姿とその意欲の変容を捉えることとした。

(2) 検証授業の分析

ア A児の事例

(7) 検証授業前のコミュニケーションに関する実態

A児は、「水が飲みたいです。」「本を読んでもいいですか。」など、その時点での自分の考えや気持ちを言葉で教師に伝えることができていた。一方で、「今日は何をしましたか。」という、自分が行ったことを思い出し表現する質問には答えることができなかった。初めて行うことや見通しがもてないことへの不安感が強く、「できない」と諦めてしまうこともあった。

(4) 検証授業での児童の様子（児童が手段を自ら選択・活用することができていたか）

第1時の発表の場面では、「つたえかた いちらん」の中からコミュニケーションボードを指差して選択した。コミュニケーションボードを自ら取り、ほうきのイラストを指差して「ほうき」と言い、ほうきを使った掃除をしたことを発表することができた。初めての活動のため、選択や発表の際に教師の顔を見ながら確認を求めている。第1時の学習後、帰りの会で教師から定型文を使ってその日に行ったことを表現するようA児に促した。

第4時では、定型文（カード）の写真カードを指差して選択し、「僕は、教室掃除をしました。ごみをとることを頑張りました。」と言葉で表現することができた。

コミュニケーションボードの活用では、描かれたイラストの単語を言うのみであったが、伝えるための手段を児童が自ら定型文（カード）に変えたことで、文章による表現を使い、考えを伝えることができた。成功体験の積み重ねにより、笑顔で表現する様子も見られた。

イ B児の事例

(7) 検証授業前のコミュニケーションに関する実態

B児は、欲しい物がある際には、教師の腕をつかみ、その物の前に誘導したり、指差しをしたりして自分の考えや気持ちを伝えようとしていた。発声はあるが発語が不明瞭であり、教師に伝わらないことが多かった。

(イ) 検証授業での児童の様子（児童が手段を自ら選択・活用することができていたか）

B児のコミュニケーションの実態から、教師が「つたえかた いちらん」に示された伝えるための手段を絵カード、コミュニケーションボード、タブレットPCにしぼり込んだ。第1時の発表の場面では、「つたえかた いちらん」の中からコミュニケーションボードを自ら選択した。選択した手段を活用し表現する場面では、選択したコミュニケーションボードの使用を教師が促したが、児童はタブレットPCを手に取り、「廊下」、「雑巾」、「頑張りました」のイラストを押して、人工の音声で自分の考えを表現した。選択した手段とは異なる手段を用いた表現ではあったが、自分の考えが相手に伝わることに気付き、第2時、第3時でもタブレットPCを活用していた。選択の際に提示したコミュニケーションボードとタブレットPCの写真カードが似ており、誤って選択したため、違いが明らかな写真カードに変更したところ、正しい写真カードを選択できるようになった。タブレットPCで表出できるイラストの種類を増やし、掃除を行った場所や「拭く」、「掃く」などの行動も表現できるようにした。

第4時では、タブレットPCの写真カードを指差して選択した。タブレットPCを取り、「机」、「椅子」、「雑巾」、「拭く」、「廊下」、「頑張りました」のイラストを押して人工の音声で自分の考えを表現することができた。積極的に手を挙げて発表したい気持ちを表していた。

ウ 対象児童全員の検証授業における伝えるための手段の選択と活用の評価

対象児童8名のうち、6名は「つたえかた いちらん」の写真カードを指差して手段を選択し、その手段を活用して自分の考えを表現することができた。他の2名は、写真カードが自分の気持ちを表現する手段の選択であるということへの理解が難しい段階であった。教師が授業場面の写真や授業で使用した実物を提示し選択を促すことで、児童は写真や実物を手に取り、伝えるための手段を選択することができた。また、教師が指差し、写真や実物に着目できるようにすることで、児童は写真に写っているものや実物の名前を言い、表現することができた。

第4 研究の成果

教師が『自分の考えや気持ちを伝える手段』を把握するための一覧表」を指導に用いることで、提示する手段が精選され、その結果、児童は「自分の考えや気持ちを伝える手段」を自ら選択することができるようになった。また、児童が手段を身に付けたことで、自分の考えや気持ちを伝えることに自信をもち、積極的に伝えることができるようになった。

このことから、『自分の考えや気持ちを伝える手段』を把握するための一覧表」を用いた指導は、児童の自分の考えや気持ちを積極的に伝えることにつながると考えた。

第5 今後の課題

児童は、自分に合った「考えや気持ちを伝える手段」を身に付け、自分の考えを表現することができた。ここで身に付けた手段は、他の学習や日常生活においても、自分の考えや気持ちを伝えることに活用できると考える。児童が他の学習や生活の場面など、より多様な場面で、自分の考えや気持ちを表現する学習活動を設定することが必要である。

また、知的障害のある児童が自分の考えや気持ちを表現する際に、ICT機器の活用が有効であった。今後、児童がさらに自分の考えや気持ちを積極的に表現することができるよう、これらの手段を用いた研究の汎用に努めていく。